

F. ブレンターノによる非命題的判断論

倉 田 剛

0. 序

命題の対象という存在論的カテゴリーへの関心は、19世紀後半から20世紀初頭のオーストリア哲学を際立たせる最大の特徴のひとつであるとともに、現代の存在論を考察するうえでも欠かすことのできない論点である。

ボルツァーノが自身の論理学を基礎づけるために提示した命題自体という概念は、様々な「誤解」を含みながらも、マルティ、マイノング、フッサールといったブレンターノ学派の哲学者たちに継承され、「事態」と総称されうる新たなカテゴリーを生み出すことになった¹。その後、ラッセルとヴィトゲンシュタインは、これらのオーストリアの哲学者たちから直接的・間接的なインスピレーションを得ることにより、「事実」と呼ばれる命題の対象を含む、あるいはそれを基本的カテゴリーに据える存在論を構想することになった (Russell 1985, Wittgenstein 1961)。そのラッセルとヴィトゲンシュタインの影響のもと、今日では、アームストロングをはじめとする形而上学者たちが現代的な事態論を展開している (Armstrong 1997)。

しかし、事態論の源であるオーストリア哲学に話題を限定したとしても、「命題から事態へ」という標語のもと、単線的な仕方で概念史を描くことができるかと言えば、そう話は単純ではない。ボルツァーノをオーストリア哲学の「母」に喩えるならば、多くの弟子たちを育て一大学派を形成するに至ったブレン

1 詳細は拙論「ブレンターノ学派における命題と事態」を参照されたい (倉田 2007)。

ターノはその「父」に喩えられようが、他でもないこの厳格な「父」こそが、命題的对象に対する最大の論敵として現れるのである。このことは、命題的对象に関する理論が、その最初期からすでにオーストリア哲学の内部において少なからぬ批判に晒されつつ展開されたことを意味する。こうした事情ゆえに、プレントナーノによる批判および彼の代替理論を検討することなしには、オーストリア哲学における命題的对象の理論を十全に論じることにはできないのである。

本稿の狙いは、プレントナーノの判断論を現代の諸解釈を参照しつつ批判的に読み解くことにある。その判断論はプレントナーノの心理学、論理学、存在論が交差する場所であり、いみじくも「非命題的判断論 (nonpropositional theory of judgment)」(Chisholm 1982, 17) と呼ばれる。われわれの関心は、判断の相関者としての命題的对象を認めない理論がどれだけ整合的な仕方で構築されるのかという問題にある。まずわれわれはプレントナーノ判断論の概要を確認した後、いくつかの疑問点を提示し、その疑問点に沿うかたちで現代哲学者による幾つかの解釈を検討する。そして最後にわれわれ自身の解釈のスケッチを提示することを試みたい。

1. プレントナーノ判断論の特徴

プレントナーノの非命題的判断論の概要を知るうえで最も重要なテキストは『経験的立場からの心理学』第2巻第7章だとされる (Brentano 1925/1959)。この章は「表象と判断 二つの異なる基本クラス」と題される。以下、われわれはこのテキストを中心にプレントナーノ判断論の骨子を確認することにしたい。

プレントナーノが最初に着手するのは伝統的な判断論の論駁である。ここで論駁の対象となっているのは、(i)表象と判断の違いを二つの作用の強度 (Intensität) の違いに帰する説、および(ii)両者の違いをそれらが向かう対象の違いに帰する説である。よく知られているように、プレントナーノは心的現象を(1)表象、(2)判断、(3)愛憎 (情意運動) の三つに大別するが、ここでは最初の二つ、すな

わち表象と判断の区別が問題となっている。さて、(i)の「強度説」は明らかにヒュームを念頭に置いた判断論であり、(ii)はアリストテレス的伝統を念頭においた判断論、すなわち判断を表象の結合と捉える理論である。ブレンターノが論駁に多くの力を注いでいるのは後者(ii)の理論であり、(i)の「強度説」は比較的簡単に片づけられてしまっている。

「強度説」によれば、思惟内容(対象)は、判断においてより大きな強度で思惟され、表象においてはより小さな強度で思惟されるという。この種の説に対しブレンターノは次のように反論する。「そのような把握に従えば、判断はより強い表象であり、表象はより弱い判断だということになってしまうであろう。しかし、表象されたものは、たとえそれがどれほど明晰判明で鮮明であっても判断されたものではないし、同様に、どんなにわずかな確信をもって下された判断であっても、それは表象ではない」(Brentano 1925/1959, 43)。

ブレンターノにとって、判断とはより大きな強度をもつ表象のことではない。判断は表象とは根本的に区別される独自の心的作用である。判断と表象との違いは、それらの対象(内容)への関わり方にある。ブレンターノ自身の表現を用いれば、判断と表象は「二つの完全に異なる種の、内容への関係」であり、「ある対象についての意識における二つの根本的に異なる様態」(ibid., 48)なのである。

判断の本質は、対象を存在するものとして承認する、あるいは否認することにある²。他方、表象はそのような性質をもたない。表象は対象の存在に関して中立的である。ゆえに、いくら大きな強度をもつ表象(鮮明な表象)でも判断とはなりえないのである。これまでのところを纏めておこう。

(U1) 判断の本質は、対象の承認と否認に存する。

2 「承認する」の原語は“anerkennen”であるが、“bejahen”、“affirmieren”とも言い換えられる。「否認する」は“verwerfen”であるが、“verneinen”“negieren”、“leugnen”とも表現される。

(U2) 判断は表象に還元不可能な独自の心的作用である。(その逆も真である。)

ここで表象と判断との関係について述べておく。プレンターノによれば、判断は表象を前提する (ibid., 38)。これは、何かが意識のうちに表象されない限り、それを存在するものとして承認することも否認することもできないことを意味する。他方、判断を下すことなしに単に対象を表象することは可能である。したがって次のテーゼが成り立つ。

(U3) 判断は表象を前提するが、その逆は成り立たない。

例えば、「怠惰な学生が存在する」という判断を下す場合、まずは〈怠惰な学生〉という対象を表象する必要がある。それを基盤にして、表象された対象を承認するという判断がなされる。したがって、プレンターノの判断論では、表象の対象と判断の対象が異なるということはない。

(U4) 判断の対象は、(その判断が基づくところの) 表象の対象でもある。

このテーゼ (U4) を自明視してはならない。なぜならば、表象の対象とは異なり、判断の対象は命題的な構造をもつという考え方は、伝統的な判断論が含意するばかりか、プレンターノと同時代の哲学者たちによっても積極的に支持されていたからである。こうした命題的な判断論を先のほどの例に即して説明すれば、われわれは〈怠惰な学生が存在すること〉を判断の対象とするのであり、この命題的对象は〈怠惰な学生〉というたんなる表象の対象とは区別されねばならないということになる。同様に、われわれは〈怠惰な学生が存在しないこと〉を否定的な判断の対象にするのであり、それは〈怠惰な学生〉という表象の対象とは明らかに異なる、とも言われる。しかし、プレンターノは一時

期を除くこうした判断独自の対象(命題的对象)を一切認めようとはしなかった。「怠惰な学生が存在する」という判断の対象は、〈怠惰な学生〉であり、それは表象の対象でもある。また、「怠惰な学生は存在しない」という判断の対象も〈怠惰な学生〉であり、これも表象の対象と同一である。ただ、前者の肯定的判断においては〈怠惰な学生〉は承認され、後者の否定的な判断においては同じ対象が否認される、というだけである。ブレンターノ判断論が「非命題的判断論」であると言われるのは、判断に対応するこうした特別の対象(命題的对象)を容認しない理論だからである。

2. 非命題的判断論のための証明

ブレンターノは自らの「非命題的判断論」を擁護するために幾つかの証明を行っている。このうちで最も代表的な証明、すなわち存在命題の分析に基づく証明を検討してみたい。ブレンターノはまず「アリストテレス的判断論」(述定の理論、主語と述語の結合の理論)が存在命題に関して成り立たないこと、そして「存在命題」と呼ばれてきたものが実は命題的構造をもたないことを主張する。

『Aが存在する』(“A ist”)とわれわれが言うとき、この命題において、多くの人がかつてそう信じ、今なおそう信じているのとは異なり、述語としての存在が主語としてのAに結合されるというような述定(Prädikation)が問題になっているのではない。〈存在〉概念(Merkmal)とAとの結合ではなく、Aそのものが承認される対象なのである」(Brentano 1925/1959, 49)。

このことを証明するに際して、ブレンターノは一つのメレオリジカルな原理を持ち出す。

(P1) ある全体を承認する者は誰でも、その全体のあらゆる部分も含めて承認する (idem.)。

この原理からプレントーノは次のテーゼを導く。

(P2) したがって、概念の結合を承認する者は常に、その結合のあらゆる部分も含めて承認するはずである (idem.)。

このテーゼが正しいとすれば、例えば〈学識のある男〉(eingelehrter Mann)、すなわち〈男〉(ein Mann) という概念と〈学識〉(Gelehrsamkeit) という概念との結合が存在すると承認する者は、或る男が存在すると承認し、かつ学識なるものが存在すると承認するはずである。

さしあたりプレントーノが自明とみなす原理およびそこから直接導かれるテーゼを認めて、今度はこれを存在命題「Aが存在する」(A ist) に適用してみよう。そうすると奇妙な帰結が得られることになる。

まず「Aが存在する」という判断は、Aと〈存在〉の結合(つまり〈Aの存在〉)を承認することであると仮定する。この仮定と先ほどのテーゼから、Aの承認と〈存在〉の承認が得られる。しかし、たんなる \dot{A} の承認と〈 \dot{A} の存在〉の承認はどのように区別されるのか、とプレントーノは問う。

この証明は、最初の仮定から矛盾を得るという意味での帰謬法ではないにしろ、余計なものを得てしまうがゆえに仮定は誤っているというタイプのものである。もちろんプレントーノが余計なものともっているのは、〈Aの存在〉という結合体に他ならない。「Aが存在する」という判断において承認されるものは、Aと〈存在〉との結合体ではなく、たんにAという対象なのである。

「Aは存在しない」(A ist nicht) という否定存在判断に関してもプレントーノは同様の証明を与えている (ibid., 50)。まずプレントーノは先ほどの証明の際に持ち出された原理の「否定ヴァージョン」は妥当でないことを確認する。

これは十分に説得的である。つまり、或る全体を否認する者は、同時にそのすべての部分を否認するわけではない。例えば、〈学識ある鳥〉、すなわち或る鳥と〈学識〉という概念との結合を否認する者は、鳥あるいは学識が現実存在することを否認するわけではない。

さて、ここで「Aは存在しない」という判断が、〈存在〉概念とAとの結合を否認すると仮定してみる。そうすると、ブレンターノによれば、Aそのものを否認するという帰結が得られないことになってしまう（全体の否認はその部分の否認を含意しない）。しかし、A そ の も の の 否 認 こ そ が わ れ わ れ の 望 む 帰 結 で は な か っ た の か。したがって、ここでも最初の仮定は誤っており、「Aは存在しない」という否定存在判断において否認される対象は、〈Aの存在〉という結合体ではなく、Aそのものということになる。

3. 無主語命題の検討

伝統的な判断論を批判し、自らの「非命題的判断論」の正当性を主張しようとする布伦ターノにとって、いわゆる無主語命題 (subjektloser Satz) をめぐる問題は大きな意味をもつ。この無主語命題の問題は、『経験的立場からの心理学』第2巻に収録されている“Miklosich über subjektlose Sätze” (1883) において主題的に論じられているほか、『正しい判断について教説』のなかでもほぼ同様の内容が考察されている (Brentano 1925/1959, 183-96; Brentano 1956)。

無主語命題の例としてまず挙げられるのが“Es regnet”（「雨が降っている」）、“Es donnert”（「雷が鳴っている」）などの命題である。こうした命題は長きにわたり論理学から無視されてきた、とブレンターノは言う（Brentano 1956, 99）。なぜならばこれらの命題は、判断が主語（表象）と述語（表象）の結合だという見解に適合しないからである。ブレンターノは、彼の師であったトレンデレンブルクが最終的には無主語命題を本来の意味での判断とは見なさなかった

こと、またヘルバルトも同様の見地に立っていたことを確認している (Brentano 1925/1959, 187)。

むしろ無主語命題における「隠された主語」を探し出す試みが為されてこなかったわけではない。例えば、ある者は“es regnet”や“es donnert”における無既定の「それ」(“es”)で指されているものはゼウス (Zeus) であると主張する。そうした論者によれば、当該の無主語命題は本来的には“Zeus regnet” (ibid., 185) や“Zeus donnert” (Brentano 1956, 99) というかたちをもつことになる。

だが、プレントナーはこうした試みに対して次のように反論する。「大音響を立てたり、雨を降らせたりしているのがゼウスだと考える人は誰もいないだろうし、もし誰かが“es rauscht” (「ざわざわしている」) と言うとき、ゼウスがその主語であり得ないことは明らかであろう」 (Brentano 1925/1959, 185; Brentano 1956, 99)。それでは、こうした命題の主語は“das Rauschen” (「ざわめくこと」) や“das Regnen” (「降ること」) (“der Regen” (「雨」)) であるのか。つまり、それらの本来的な形は“das Rauschen rauscht”や“das Regnen (der Regen) regnet”であるのか。

実はこうした試みもうまくいかないことをプレントナーは“Es fehlt an Geld” (「お金が足りない」) という例によって示す。この例において、“das Fehlen” (「不足していること」) が主語であるとすれば、“das Fehlen an Geld fehlt an Geld”となるが、これでは意味が通らない。それでは“das Geld” (「お金」) が主語であるのか。そう考えれば“das Geld fehlt an Geld”となるが、これは意味が通らないというより、むしろプレントナーが指摘するように「説明の望まれる統一性に対するゆゆしき違反」 (Brentano 1925/1959, 185; Brentano 1956, 100) であろう。つまり、こうした主語探しの試みは場当たりのもの、アド・ホックなものでしかありえず、統一的な説明にはほど遠いと言わざるを得ないのである。

無主語命題に関する以上の考察は、判断の本質を主語と述語の結合と見なす

伝統的判断論を反駁するうえで極めて重要であることは今や明らかであろう。ブレンターノにとって判断の本質は、主語と述語の結合にあるのではなく、表象された対象を承認あるいは否認することにある。そもそも無主語命題は命題的な構造をもたず、その「隠された主語」を探する必要などないのである。“es regnet”においては“der Regen”(「雨」)が現に存在するものとして承認され、“es regnet nicht”では同じ対象が否認されるだけのことである。同様に、無主語命題の代表格である“es gibt einen Gott”(「神は存在する」)における「隠された主語」を詮索して“Gott gibt einen Gott”や“das Geben gibt einen Gott”などと考える必要はまったくない。その判断においては、たんに“Gott”(「神」)が存在するものとして承認されているに過ぎないからである。

4. 存在命題への還元と二つの疑問点

これまで見てきた存在命題、および無主語命題に関して言えば、ブレンターノの主張は十分に説得的である。これらの命題によって表現される判断は命題的な構造をもたず、また、その相関者としての命題の対象を指定する必要はない。しかし当然ではあるが、あらゆる判断が存在命題あるいは無主語命題のかたちをとるわけではない。むしろそうした命題は、判断論・論理学において常にマージナルな位置しか与えられてこなかった。

伝統的な論理学が特権視してきたのは「すべてのAはBである」などのかたちをもつ、定言命題である。この定言命題に関してブレンターノはどのように対処するのであろうか。これがブレンターノ判断論あるいは論理学においてもっともよく知られた「四つの定言命題の存在命題への還元」(Rückführung der vier kategorischen Sätze auf Existentialsätze)という主題である(Brentano 1925/1959, 57)。

周知のごとく伝統的論理学は定言命題を次の四つの型に分類する。

(a 型：全称肯定) すべてのAはBである。(すべての人間は死すべきものである。)

(e 型：全称否定) いかなるAもBではない。(いかなる石も生きものではない。)

(i 型：特称肯定) あるAはBである。(ある人間は病気である。)

(o 型：特称否定) あるAはBではない。(ある人間は学識ある者ではない。)

これらの定言命題は、プレッターノによれば、その意味をまったく変えることなく存在命題に還元あるいは「翻訳」されうる (ibid., 56-7)。

(a 型*) 非BのAは存在しない。(例：不死の人間は存在しない。)

(e 型*) BのAは存在しない。(例：生きている石は存在しない。)

(i 型*) BのAが存在する。(例：病気の人間が存在する。)

(o 型*) 非BのAが存在する。(例：学識のない人間が存在する。)

かくして定言命題の四つの型はすべて存在命題に書き換えられたことになる。定言命題にとって本質的であった繫辞(「である」「ist」)は、すべて存在の「ist」(「存在する」、「ある」)に置き換えられ、もはや無用の長物となるのである。そして、存在命題というものが命題的構造をもたないことはすでに「証明済み」である。プレッターノがこの成果を、繫辞による述定を排した判断論(非命題的判断論)のための最大の論拠だと考えたのはごく自然なことだと言えよう。

だが、伝統的判断論が依拠してきた述定という考え方をそれほど容易にお払い箱にできるのであろうか。また、この還元の作業のなかに何か厄介な概念が密かに持ち込まれてはいないか。「存在命題への還元」が非常にクレヴァーな操作だけに、そのように疑いたくなかったとしても不思議ではない。

まず挙げられるべきは「BのA」という表現にまつわる疑問点である。例えば、伝統的なe型「いかなる石も生きていない」は、プレッターノに従えば「生

きている石は存在しない」と書き換えられるが、「生きている石」(「BのA」)という表現は、「生きものである石」(「B seiendes A」)とも表現されることに注意しなければならない。ここには述定という伝統的な概念が明らかに前提されてはいないだろうか³。なるほどブレンターノが言うように、こうした表象の結合自体は判断ではない。しかしそうだとすると、述定の概念を認めずに、表象の結合を説明するとはどのようなことなのか。

第二の疑問点は、表象内に現われる「否定」に関するものである。繰り返して述べてきたように、ブレンターノにとって判断は承認か否認のいずれかである。「否認」は判断という心的作用の性質であり、表象内容に付される「否定」とは区別されるべきである。すなわち、Bの否認と「非BのA」のなかに現れる否定的表象〈非B〉は区別されねばならない。このことは、否認を用いて「否定」を説明することができないことを意味している。ところで、命題を許容する論理学ではこうした問題は生じない。いわゆる「述語否定」と呼ばれるものは、すべて命題否定(文否定)を使って説明できる。一例を挙げれば、「aは非賢者である」は「aは賢者ではない(〈aは賢者である〉ということはない)」となる。

ブレンターノの非命題的判断論は、〈非B〉という否定的表象を他の概念に解消されえないものとして捉えているのである。しかし、命題の対象を疑わしきものとして斥ける一方で、こうした「否定者」(Negativa)を容認せざるをえない理論は果たして整合的なものと呼べるであろうか。〈白〉という表象と並んで〈非白〉という否定的表象を要求する理論が、命題の対象に限ってそれを排除するというのはおかしいのではなからうか。

3 Velarde-Mayol は同様の問題を指摘している (Velarde-Mayol 2000, 52)。例えば「ある人間は賢い」を存在命題にした「賢い人間が存在する」において、排除されたはずの〈賢さ〉と〈人間〉の総合 (synthesis) あるいは述定 (predication) が密かに前提されているのではないかと問うている。しかし、Velarde-Mayol は、ブレンターノがそうした総合を認めつつも、それは前判断のレベル、すなわち表象のレベルで行われると考えていたことに依拠し、それ以上この問題を検討することをしていない。

これらの疑問を念頭に置きつつ、以下でわれわれは、現代の哲学者たちがプレ
ンターノ判断論をどのような仕方で解釈してきたかを見ていくことにする。

5. プライアーによる定式化

20世紀の卓越した論理学者・哲学者であり、かつ論理学史に精通していた A.
N. プライアーは、少なくとも二度にわたって、短くではあるがプレンターノ判
断論に関する注釈を行っている (Prior 1962; Prior 1976)。

プライアーによる「存在命題への還元」の定式化は、まずもって次の仕方で
提示される (Prior 1962, 166)。この定式化は現代の読者にとっても受け入れや
すいものであろう。

(e 型) No A is a B=Nothing is at once an A and a B

(i 型) Some A is a B=Something is at once an A and a B

しかし、プライアーはこの書き換えがプレンターノ自身の考えを正確に表し
たものではないことを完全に自覚しており、括弧つきではあるが、本文中に以
下のような「改訂版」を書き添えている。

(e 型⁺) A-and-B? — No!

(i 型⁺) A-and-B? — Yes!

ここでの「A-and-B」は、例えば「病気-かつ-人間」のような複合タームで
ある。そして「?」は単なる表象作用を表現している。その後続く「Yes!」
「No!」はそれぞれ承認・否認という心的作用の表現である。プライアーはこの
極めてユニークではあるが、プレンターノの思想により忠実な定式化を後の
『命題とタームに関する教説』(1976)のなかでさらに発展させる (Prior 1976,

111f.)。

先の二つの型に a 型と o 型を加え、次のようなかたちで四つの型が提示される⁴。

(a 型+) A-and-not-B? — No! (哲学者-and-非喫煙者? — No!)

(e 型+) A-and-B? — No! (哲学者-and-喫煙者? — No!)

(i 型+) A-and-B? — Yes! (哲学者-and-喫煙者? — Yes!)

(o 型+) A-and-not-B? — Yes! (哲学者-and-非喫煙者? — Yes!)

プライアーの定式化において興味深いのは、それがまったく命題間の翻訳になっていない点である。つまり、定言命題の四つの型は、何の命題構造ももたないような形式に書き換えられている。興味深いのはそれだけではない。上でわれわれの疑問点として挙げた、表象のレベルにおける結合の問題は、誤解の生じにくいかたちで定式化されている。すなわち「A-and-B」というかたちは、述定 (B である A : A which is B) が密かに持ち込まれているのではないかという疑念を払拭してくれるように見える。だが、プライアー自身はこの「A-and-B」の「and」が何を表しているかに関しては詳細を述べていない。

さて、上の定式化を見れば判明に見てとれるように、伝統的論理学における全称命題は、肯定形 (a 型) であれ否定形 (e 型) であれ、ブレンターノ判断論のなかでは、否定的 (否認) 判断として扱われ、同様に、特称命題は、肯定形 (i 型) であれ否定形 (o 型) であれ、実のところ肯定的 (承認) 判断だということになる。

これにより伝統的論理学における三段論法の規則はかなりの変更を余儀なくされることが予想される。例えば、二つの全称命題を前提としてもつ三段論法は、二つの「否定的」な前提をもつ推論である。ゆえに、伝統的論理学が

4 「A-and-not-B」は「A-without-B」、「A-and-B」は「A-with-B」とも言い換えられているが、ここでは各々の前者の表記を採用する。

“Barbara”と呼んできた三段論法は次のように書き換えられる。

B-and-not-C? — No!

A-and-not-B? — No!

Hence: A-and-not-C? — No!

プライアーも指摘するように、プレントーノの三段論法は四つのタームを含み（ここでは A, B, not-B, not-C）、そのうちの二つのタームは、一方が他方を「否定」するかたちをとる。“Darii”も同様に四つのタームを含む。

B-and-not-C? — No!

A-and-B? — Yes!

Hence: A-and-C — Yes!

このようにプライアーは、独特の記法を用いてプレントーノ判断論と伝統的論理学を比較検討しているが、ここではその詳細をみることはできない。われわれにとって重要なことは、非命題的な判断論の定式化がどのようなかたちをとりうるかということである。プライアーはこの問題にある一定の解決を与えたと言いうるのではなかろうか。しかし、プライアーは「A-and-B」という結合が何であり、また「not-A」のような否定的タームが含意する存在論的な問題について何も述べていない。

6. サイモンズによる定式化

プレントーノの非命題的判断論は、近年、P. サイモンズによって極めて厳密に定式化されることになった。サイモンズの定式化の特徴は、プレントーノが暗黙のうちに認めていた原理（推論規則）を明示化し、基本的な推論に証明を

与えるという点にある。

まずサイモンズが用いる表記法を解説しておこう。“E…”は「…は存在する」を、“N…”は「…は存在しない」を表す。これらはプレントナーの意に従い、二つとも原始的な動詞（関数表現）であるとされる（つまり未定義であり、一方が他方を定義することもない）。“a”, “b”, …といった小文字のアルファベットはタームであり（表象された対象を指す）、“—”はターム否定を表す。例えば“—a”は「非 a」と読む。これらを用いて件の定言命題を書き換えれば次のようになる。

(a 型**) $Na \neg b$ (非 b の a は存在しない)

(e 型**) Nab (b の a は存在しない)

(i 型**) Eab (b の a は存在する)

(o 型**) $Ea \neg b$ (非 b の a は存在する)

サイモンズの定式化は、プライアーの定式化と異なり、命題的な構造を依然として維持しているように見えるが、“E”と“N”はあくまでも承認と否認という心的作用を表現しており、タームを結合する「述語」として捉えられていないことに注意する必要がある。タームの結合は、承認あるいは否認という判断作用よりも前に、表象のレベルで行われる。つまり“ab”などの表現はすでに $\dot{a}\dot{b}$ 表象結合 (idea-conjunction) を表している (Simons 2004, 51)。この表象結合は次のように規定される。

(IC) x は $A \dot{B}$ (A and B) である (ii) x は同時に A でありかつ B である。

判断のレベル以前に為される表象の結合に関して、プライアーと同様に、サイモンズはまったく自覚的であるように見える。むしろ、「 AB 」(A and B) を「メタ言語」で説明する際は、「 A でありかつ B である」のような述定を持ち込

まざるをえないとはいえ、AB自体が述定を含まない結合であることは確実に見て取れる。しかし、こうしたABという結合体がいかなる対象であるかに関して立ち入った検討は行われない。

さて、以上の準備段階を経て、いよいよサイモンズはプレントナーノ判断論の再構成に着手する。まず手始めに、プレントナーノが無条件に認めていた無矛盾律の定式化を見てみよう。

(TNC) $\text{Na} \rightarrow a$ (非 a の a は存在しない)

実を言えばこの「公理」はサイモンズによる推論の証明には必要とされない。必要なのはむしろ以下の原理である。

(WEAK) Eab/Ea (b の a は存在する。したがって、 a は存在する)

ここでのスラッシュ“/”は「したがって」と読まれる。スラッシュの左側が前提であり、右側が結論である。この原理の意味は、 b である a という対象が存在するという前提から、その b を取り除いた a という対象が存在すると結論してよい、というものである。例えば、「パンツをはいたサルは存在する」から「サルは存在する」を導いてよい。結論に現われる対象が前提の対象よりも「より弱い (weaker)」あるいは「より特殊でない」(less specific) ことから、サイモンズはこれに「弱化原理」(Principle of Weakening: WEAK) という名前を与えている (Simons 2004, 54)。プレントナーノ自身はこの原理に名前をつけることはしなかったが、それを自明のものだと考えていた (Brentano 1956, 209)。

この WEAK といわば対をなすのが STREN という原理である。これは次のように定式化される。

(STREN) Na/Nab (a は存在しない。したがって、 b の a は存在しない)

これもほぼ自明であろう。例えば、「雪男は存在しない」から「パンツをはいた雪男は存在しない」は何の問題もなく導けるように思われる。結論に現われる対象は、前提の対象よりも「より強い」(より特殊である)。このことから、この原理は「強化原理」(Principle of Strengthening: STREN) と呼ばれる。これもブレンターノが暗黙裡に認めていた原理である (Brentano 1956, 209)。

ただし、サイモンズも指摘するように、ブレンターノは「馬は存在する」から WEAK を用いて「動物は存在する」を導き、「空間的な事物は存在しない」から STREN を用いて「かたちは存在しない」を導くといった推論を行う。これらは分析的な判断の例としては興味深いが、厄介な問題を少なからず孕むがゆえに、サイモンズに倣ってここでは扱わないことにする。

これらに加えて、サイモンズはさらに二つの原理を定式化する。一つ目の原理は「剰余原理」(Remainder Principle: REM) と呼ばれ、二つ目の原理は「網羅原理」(Exhaustion Principle: EXH) と呼ばれる。

(REM) $Nab, Ea/Ea-b$ (b の a は存在しない。 a は存在する。したがって、非 b の a は存在する。)

(EXH) $Nab, Na-b/Na$ (b の a は存在しない。非 b の a は存在しない。したがって、 a は存在しない。)

REM は次のような意味をもつ。 a が存在するとすれば、以下の二つの可能性が生まれる。すなわち、 b の a が存在する可能性と非 b の a が存在する可能性である。ここでその一方の可能性 (b の a が存在する可能性) が排除される。そうすると他方の可能性 (非 b の a が存在する可能性) が残る。例えば、「日本人が存在する」とすれば、「幸せな日本人が存在する」可能性と「不幸せな日本人が存在する」可能性という二つの可能性が考えられる。ここで「幸せな日本

人は存在しない」と仮定する。そうすると「不幸せな日本人が存在する」という可能性が残る。

EXH のほうは次のように解される。もし b の a は存在せず、また非 b の a も存在しないのであれば、そもそも a は存在しないと結論してよい。つまり、 a が存在する場合に生じるケースは、この前提のなかですでに汲みつくされている（網羅されている）ということである。対偶をとれば、 a が存在するのであれば、 b の a または非 b の a が存在する、ということになる。この対偶の例を挙げれば、人間が存在するのであれば、ハゲの人間が存在するか、非ハゲの人間が存在する。当然、ハゲの人間も非ハゲの人間も存在しないならば、そもそも人間は存在しない。

サイモンズはこれらの原理を用いて、プレントーノが妥当だと認める三段論法の二つの型に証明を与えている (Simons 2004, 57)。その二つの型はそれぞれ「肯定三段論法」(POS) と「否定三段論法」(NEG) と呼ばれる。ここではそれを幾分簡略化したものを検討する⁵。

(POS) $Eab, Nbc/Ea-c$ (b の a は存在する。 c の b は存在しない。したがって、非 c の a は存在する。)

(NEG) $Na-b, Nbc/Nac$ (非 b の a は存在しない。 c の b は存在しない。したがって、 c の a は存在しない。)

POS の証明

- 1 Eab 仮定
- 2 Nbc 仮定

5 サイモンズ自身は、「toggle」オペレーター」と彼が呼ぶ概念「*」を導入している。「 a 」が肯定的なタームであれば、「 $*a$ 」はその否定ターム「 $\neg a$ 」であり、「 a 」がもともと否定ターム「 $\neg b$ 」であれば、「 $*a$ 」はその肯定ターム「 b 」であり、二重否定ターム「 $\neg\neg b$ 」とはならない (Simons 2004, 53)。われわれは議論が煩瑣になることを避けるためこのオペレーターを用いないことにする。

- 3 Nabc 2, STREN
- 4 Eab—c 1, 3 と REM
- 5 Ea—c 4, WEAK

NEG の証明

- 1 Na—b 仮定
- 2 Nbc 仮定
- 3 Na—bc 1, STREN
- 4 Nabc 2, STREN
- 5 Nac 3, 4, EXH

詳細を検討することはわれわれの手に余るが、サイモンズ＝ブレンターノによれば、POS からは伝統的論理学の Darii、Datisi、Disamis、Dimaris、Baroco、Bocardo、Ferio、Festino、Ferison、Fresison という推論が産出され、NEG からは Barbara、Celarent、Cesare、Camenes、Camestres という推論が産出されるという (Simons 2004, 57)。いずれにせよ、サイモンズの解釈は、ブレンターノの非命題的判断論が、たんに哲学・心理学・存在論的な探求が生み出した奇怪な論理学として見なされるべきではなく、現代の論理学者による厳密な定式化を可能にする程度には完成されていたことを示すものである。だが、厳密な定式化は、必ずしもわれわれが提起した疑問点、すなわち表象結合の問題と否定的表象の問題に明確な解答を与えるものではない。

7. チザムによる解釈

現代を代表する形而上学者であるばかりでなく、ブレンターノをはじめとする「オーストリア哲学」の最大の理解者の一人でもある R. チザムは、「ブレンターノの判断論」と題する重要な論文のなかで、いかにも彼らしい独特の仕方

で非命題的判断論の整合的な解釈を試みている。チザムの試みはサイモンズのそれとは異なり、形式的な再構築というよりはむしろプレンターノ自身のメタ言語による規定を重く見る内容となっている。ゆえに、チザムによる定義にはつねに「判断する者」への言及が含まれることになる。というのも、プレンターノにとって正しい判断とは、「人が何事かについて正しく (richtig) 判断する (承認する・否認する) こと」に他ならないからである。その一例を挙げるとするならば、プレンターノは無矛盾律 (「(PかつPでない) ということはない」) がより正確には次のようなかたちをとると考えていた。

「ある者が正しく承認しているものを他の者が否認すること、しかもそれを正しく否認することは不可能である。また同様に、ある者が正しく否認しているものを他の者が承認すること、しかもそれを正しく承認することは不可能である」 (Brentano 1956, 202)

現代人の目には奇異に映るが、プレンターノの判断論ではこのような仕方ですべて「判断する者」への言及が逐一なされているのである。かくしてチザムによる定義は以下のような仕方になされる。

(Di) 判断者は、あるAはBであることを判断する = def. 判断者はBであるAを承認する。 (He judges that some A are B = Df He accepts an A which is a B.)

(Do) 判断者は、あるAはBでないことを判断する = def. 判断者は非BであるAを承認する。

チザム自身も注意を促しているように、ここでは命題の定義が問題となっていないのではない (Chisholm 1982a, 23)。すなわち、a型の命題「すべてのAは

Bである」はブレンターノ論理学では「非BであるAは存在しない」と定義されるということを示しているのではない。そうではなく、ここではある型の判断の定義が問題となっているのである。だが、このチザムの戦略は「諸刃の剣」にもなりうる。なるほどチザム＝ブレンターノはあくまで心的作用としての判断に関する理論を構築しているのであって、既成の論理学を疑問視するようなことはしない、という見方をすれば、これは非常に「穏当」な立場である。また、こうした立場を取れば、論理学とは独立に、「判断の心理学」ないしは「論理学の認識論」を緻密に練り上げることができるであろう。しかし他方で、それはブレンターノが目指した「論理学の改革」という目標から完全に遠ざかってしまうことになりかねない。チザムによれば、ブレンターノは、ある対象を承認する作用とその対象を否認する作用が矛盾対当 (contrary) にあると捉えることによって、ある者が同時に矛盾する判断 (同時にある対象を承認し、否認する判断) をすることの不可能性を説明しえたとされるが (Chisholm 1982a, 25)、その一方でブレンターノ自身は、彼の「非命題的判断論」がたんに心理学的な領域で妥当であるばかりでなく、既成の論理学を変革しようと考えていたことは確実である。とはいえ、ここでは19世紀後半の「心理主義」をめぐる諸問題にこれ以上深入りすることは避け、チザムによるブレンターノ解釈の検討に話を戻すことにしたい。

チザムは表象の複合に関して「A which is B」という、いかにも述定を前提するような表現を用いるが、従来の述定とは異なり、それは「A-which-is-B」とでも表現されるようなものであり、「B-which-is-A」と交換可能であることが付け加えられている (述定ではないのでAとBの順番はどうでもよい) (ibid., 23)。そして、チザムは「A-and-B」という表現を、「A-which-is-B」とは区別される、あるメレオロジカルな概念として用いている。

チザムによれば「A-and-B」は、AとBを (部分として) 含む結合体あるいは集まりである。例えば「馬-と-人間」(horse-and-man) は、馬と人間を含む集まりと解される。これは「A-which-is-B」とは異なり、AとBのいずれか

一方が他方に述語づけられる必要はないとされる (ibid., 18)。たしかに「茶色-である-犬」(a dog-which-is-a-brown-thing) では茶色のものが犬に述語づけられるのに対し、「馬-と-人間」は、馬か人間のどちらか一方が他方に述語づけられるということはない。また「馬-と-人間」という集まり自体は、馬でも人間でもない。それに対し「茶色-である-犬」は犬である。なお、ここでも「A-which-is-B」という表象結合に関して述定を前提しているとの疑いは晴れないが、述定はあくまで「メタ言語」のなかで使用されていると擁護することは可能である。

「馬-と-人間」のような集まりは、何の役に立つのであろうか。チザムはこのような集まりを複合判断の定義のために用いる。例えば、次のような定義が示される (ibid., 26)。

(Dc)判断者はAが存在し、かつBが存在することを判断する = def. 判断者はA-and-Bを承認する。

「馬が存在し、かつ人が存在する」と判断する者は、より適切に(プレンターノ流に)言えば、「馬-と-人」という集まりを承認している、というわけである。これは確かに便利な道具立てであるが、こうした定式化については、判断の複合をたんに対象の複合に置き換えただけではないかという疑念も生じる。実際、チザムは選言的な複合判断を定義するために、「A-or-B」といった複合的対象(選言的対象?)の導入さえ行っている。

チザムは否定的表象に関してはいかなる見解をもっていたのであろう。興味深いことに、チザムはプレンターノが初期判断論の「修正版」として提示した「二重判断」という考えを用いて、0型の判断から否定的表象を取り除いた定義を行っている。二重判断とは、まずある対象が承認され、その最初に承認された対象について何かが認められる、あるいは棄却されるような判断のことをいう。ここでは二重の契機が問題となる。まず最初に主語の指す対象が承認され

るという契機があり、それにある対象が述語づけられることを認めるか、あるいは棄却するかという契機が重なるのである。だが、これは非命題的判断論の立場から言えば明らかな「後退」でしかなく、従来の存在判断に加え、この二重判断を許容することは理論的な整合性を著しく損なわせることになりかねない。いずれにせよ、二重判断を用いれば、「非BであるAを承認する」(「あるAはBではない」)という判断は、否定的表象を含まない「Aを承認し、BがAに述語づけられることを棄却する」というかたちに書き換えられるであろう。

だが、二重判断を認めず、当初の非命題的判断論に忠実であろうとすれば、否定的表象を取り除くことは不可能である。

8. むすびにかえて：われわれの提案

繰り返し指摘してきたことだが、非命題的判断論を擁護するためには、述定以外の原理によって表象の結合を説明しなくてはならない。ブライアー、サイモンズ、そしてチザムは、それぞれ表象の結合を「A-and-B」、「AB」、「A-which-is-B」と表現し、それが従来の述定による結合とは異なることを強調した。しかし不思議なことに、それを部分-全体として明示的に捉えることはしていない。これはサイモンズとチザムがメレオロジーに精通していることを考えあわせれば、さらに不思議なことである。

われわれは次のような提案を行いたい。伝統的なi型「ある人間は賢い」はブレンターノによれば〈賢い人間〉を存在するものとして承認する判断である。この〈賢い人間〉という複合表象を、「ある人間は賢いものの部分である」というように解釈することはできないだろうか。もちろん、このままでは述定(「AはBの部分である」)を複合表象に持ち込んでしまうことになる。したがって、より正確には「賢いものの部分としての人間」と言い換えられなくてはならない。このように考えれば、当該の判断は「〈賢いものの部分としての人間〉を承認する」とことと定義できる。この定義のメリットは、ブレンターノの見地から

は「派生的」と見なされるであろう述定的命題に一意的に翻訳できるという点にある。つまり、ここでは部分が「主語」になり、全体が「述語」になるのである。これまで見てきた「A-and-B」、「AB」、「A-which-is-B」は、そのいずれにおいてもAとBは可換的なため、翻訳する際にどちらが主語でどちらが述語であるかは決定できなかったことを鑑みれば、われわれの提案には明らかなメリットがある。

しかしながら、この提案には困難があることも確かである。というのも先ほどの「〈賢いものの部分としての人間〉を承認する」ことは、「すべての人間は賢い」という従来のa型にも翻訳されてしまうように見えるからである。だが、これは「〈非賢いもの（愚かなもの）の部分としての人間〉を否認する」あるいは「〈賢いものの非部分としての人間〉を否認する」と定義することで解決するように思われる。e型「いかなる人間も賢くない」に関しては、「〈賢いものの部分としての人間〉を否認する」となり、o型「ある人間は賢くない」は「〈非賢いもの（愚かなもの）の部分としての人間〉を承認する」あるいは「〈賢いものの非部分としての人間〉を承認する」となるであろう。

われわれの提案に関する二つ目の困難は、どのようにしていわゆる単称命題との区別をつけるのかという問題である。よく知られているように、プレントノー学派の伝統において「この男は賢い」という単称命題は「賢さというモメント（個別化された性質）がこの男に内属している」と解される。そしてこの内属関係は、部分-全体関係として捉えられることもある。これを単純なかたちで定式化すれば「〈この男の部分としての賢さ〉を承認する」となろうが、この部分概念は明らかにわれわれが上で用いた部分概念とは異なるものである。こうした困難に対しては二つの異なる部分概念を認めることによって対処せざるをえないであろう。いずれにせよ、われわれの提案は素描の段階に過ぎず、今後の課題としてより適切な定式化を見つけなければならない。

最後に、否定的表象に関して一言述べておきたい。チザムも指摘していたように、否定的表象は二重判断を用いて部分的には排除することができる。しか

し、二重判断という「折衷案」を認めないのであれば、われわれは全面的に否定的表象を容認しなければならない。これは理論的な選択の問題ではあるが、われわれは二重判断を排し、否定的表象を容認する立場をとりたい。というのも、二重判断はどのように好意的に解釈しても当初のラディカルな理論からの「後退」であり、「非命題的判断論」の名に値しないと考えるからである。非命題的判断論に忠実でありたいのなら、否定的対象を含む存在論を基礎にしなければならない。しかし、それは命題的对象を含む存在論と比べどれだけ「健全」であると言えるのか。命題的判断論および命題的对象を認める存在論に、非命題的判断論を対置する者にとってこの問いは避けることのできない問いである。

参考文献

- Albertazzi, L., et al. (eds.), (1996) *The School of Franz Brentano*, Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.
- Armstrong, D. M., (1997) *A World of States of Affairs*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Brentano, F., (1874/1973) *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Bd. I, hrsg. von O. Kraus, Leipzig: Meiner.
- Brentano, F., (1925/1959) *Psychologie vom empirischen Standpunkt*, Bd. II, hrsg. von O. Kraus, Leipzig: Meiner.
- Brentano, F., (1883/1925) “Miklosich über subjektlose Satze”, in: Brentano 1925/1959, 183-196.
- Brentano, F., (1930) *Wahrheit und Evidenz*, hrsg. von O. Kraus, Hamburg: Meiner.
- Brentano, F., (1956) *Die Lehre vom richtigen Urteil*, hrsg. von F. Mayer-Hillebrand, Bern: Francke.
- Chisholm, R. M., (1982) *Brentano and Meinong Studies*, Amsterdam-Atlanta: Rodopi.
- Chisholm, R. M., (1982a) “Brentano’s Theory of Judgment”, in: Chisholm 1982, 17-36.

- Jacquette, D., (ed.), (2004) *The Cambridge Companion to Brentano*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 倉田 剛 (2007) 「プレッターノ学派における命題と事態」、九州国際大学『教養研究』第14巻第1号、73-98.
- Parsons, C., (2004) “Brentano on Judgment and Truth”, in: Jacquette 2004.
- Prior, A. N., (1962) *Formal Logic* [Second edition], Cambridge: Cambridge University Press.
- Prior, A. N., (1976) *The Doctrine of Propositions and Terms*, Amherst: University of Massachusetts Press.
- Russell, B., (1985) *The Philosophy of Logical Atomism*, D. Pears (ed.), Chicago: Open Court.
- Simons, P., (2004) “Judging Correctly: Brentano and the Reform of Elementary Logic”, in: Jacquette 2004, 45-65.
- Velarde-Mayol, V., (2000) *On Brentano*, Belmont: Wadsworth.
- Wittgenstein, L., (1961) *Tractatus Logico-Philosophicus*, London: Routledge.